学校 × docomo

ICT活用で、ふるさと「御所市」を愛し未来を切り開く力を育む

ー 奈良県御所市

目的

- ☐ 地域を愛し、ふるさと御所を誇りに思う子どもたちの育成
- ☐ 学びの継続力、主体性、未来を切り拓く力を育てる
- ☐ 学校、家庭、地域が連携・協働した子どもを支える街づくり

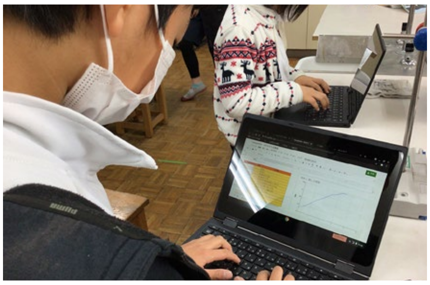
アプローチ

- ☑ 誰一人取り残さない、公正に個別最適化された学びを実現するタブレット選定
- ☑「いつでもどこでも」使えるLTE通信を活用できるセルラーモデルの選定
- ☑ あんしんして活用するための一元的な保守及び研修体制の構築

ICTを使うことが目的ではなく、一人ひとりの学びの道具へ

GIGAスクール構想にもとづいて、御所市では市内のすべての小学校・中学校に対し、LTEモデルのChromebookの導入を選択。御所市ならではの魅力や抱えている課題を児童生徒が自ら考え、フィールドワークなどの調査を行い、発表までを協同作業で行う『シティズンシップ教育』においてもフル活用されています。

『シティズンシップ教育』×ICT で、子どもたちの学びの機会が広がる



奈良県のほぼ中央に位置する人口約25,000人の御所市。GIGAスクール構想における端末導入検討をいちはやく開始。2020年10月までには市内すべての公立小学校と中学校に一人1台のChromebookが行きわたるように環境を整えました。その後約半年間の準備期間を経て、2021年度から電子黒板などとも組み合わせた教育ICTの本格的な活用がスタートしました。児童生徒・教職員は、奈良県教育委員会から貸与された個人で利用できるアカウントを使って、授業や学級で共同編集ができるアプリケーションやビデオ会議ツールを利用するといった光景が日常化しています。また、導入前までは実現が難しかった学校間をつないだ双方向型の学習など、積極的に利活用を進められています。

御所市が特に注力しているのが、市の教育大綱にも明記している「地域を愛し、「ふるさと御所」を誇りに思い、未来の御所を切り拓く子どもの育成」をめざした『シティズンシップ教育』。御所市教育委員会教育長の濵中誠氏は「子ども自らが学び続け、知識・スキル・意識を基盤に、自力または他者と共同して、地域課題などの解決に向けて主体的に参画し、未来を切り拓くことができる市民性を育みたい」と話しています。ICTを利活用することで学びの機会が広がり、地域の方とつながって「問題解決にかかわる力・参画する力」を身に付けられることも期待されています。

教育長 濵中誠氏

御所市教育委員会

〒639-2298 奈良県御所市1番地の3
URL：https://www.city.gose.nara.jp/

多くの文化財や史跡があり、自然豊かな奈良県御所市では、2020年度から市内すべての7つの小学校と4つの中学校でICT環境整備に取組みはじめました。Chromebookと電子黒板などを導入し、翌2021年度から本格的な運用を開始しています。郷土愛を育む『シティズンシップ教育』を中核に、子どもたちが主体的に学ぶ環境づくりの一環として、積極的にICTを活用しています。

［取材協力］御所市立御所小学校

地域とつながる『シティズンシップ教育』で、LTEモデルのChromebookが大活躍

フィールドワークでの記録や質問の深掘がかんたんに

御所市立御所小学校では、全学年で『シティズンシップ教育』に取組んでいます。5年生の「総合的な学習の時間」では、御所市内でフィールドワークを実施し、その調査結果をグループごとに発表する活動が行われていました。発表までの一連の過程を通じて、子どもたちは扱うテーマから自分たちで考え、取材先も自ら調べ、プレゼンテーション資料作成アプリケーションの共有機能を上手に使って発表資料を作りあげていました。また、実際に行われた市内のフィールドワークでは、各自のChromebookで写真や動画を撮影し、取材内容を記録しました。「グループ全員でアイデアを出しながら、みんなで一緒に資料を作ることができるのが便利だし、面白い」と子どもたちが意欲的に活動している姿が見られました。御所小学校の山本訓子教頭は「子どもたちは取材の際、わからない言葉についてはその場で検索し、さらに深堀して質問する場面もありました」と話しています。

LTEモデルのChromebookだからこそ活用や活動の場が広がる

5年生による御所市内のフィールドワークは、他学年に向けて発表する場が設けられました。教室や体育館などで各グループが発表を行い、他学年の子どもたちはスタンプラリー形式で学校内を回り、5年生の発表を聞いていくスタイルです。「この授業の狙いは、『自分のまちのことを知る』です。

樋口剛史校長

山本訓子教頭

フィールドワークでの活用だけではなく、校内のこうした活動も、場所を選ばずどこでも端末を使うことができるLTEモデルのChromebookが大いに役立っています」と山本教頭はそのメリットを語っています。

積極的に使うことで子ども自らの活用が生まれる

子どもたちが自主的にタイピングの練習をはじめた

Chromebookを一人1台持つことにより、子どもたちにも大きな変化が生まれています。山本教頭は「英語が必修教科になったことでアルファベットを苦手と感じる子どもたちでも、Chromebookのキーボード入力には抵抗がなく、学習意欲の高さを感じています」。ある程度子どもたちに自由にChromebookを使える環境を整えることで、休み時間に自主的にタイピングの練習をしたり、音声入力機能を見つけて先生に教えてくれたりといった行動につながっています。今後は、対面開催が中止になった市内の音楽会のオンライン開催などで、子どもたちの学びへのモチベーションをより高めていく取組みの検討を進めています。

小中学校連携の「プロジェクトチーム」で ICT 活用を研究

さらに市内小中学校の教員による「ICT活用プロジェクトチーム」が授業作りの研究を行っています。さらなる活用のために「授業の組み立ては得意だがICT活用は苦手」「経験は浅いが、ICT利活用のノウハウはある」など、教員同士でも互いに得意とすることを組み合わせて、ICTをうまく取り入れた授業を行うことをめざしています。山本教頭は「学校でもサポートし合う文化や環境をつくっていく必要がある」と課題を話しています。また、教育長の濵中氏も「ICTの本格的な運用開始から半年後に授業を見学したところ、思っていた以上に先生方は工夫してICTを活用し『子どもたちによりよい授業を』という強い想いが伝わってきた」と、ICT活用が学校現場に浸透しはじめている手ごたえを語りました。

お問い合わせ
株式会社NTTドコモ
ドコモ・コーポレートインフォメーションセンター（0120-808-539）
受付時間：平日午前9時〜午後6時（土・日・祝日・年末年始を除く）

法人のお客さま　ドコモビジネス
Smart World for Education
https://www.docomo.ne.jp/biz/special/education_ict/

docomo business

※本チラシの内容は2021年12月取材時点のものです。